NAGASAKI REHABILITATION HOSPITAL

基本理念

質の高いリハビリテーションサービスを集中的且つ効率よく提供することで、地域に貢献します。

専門職が徹底したチーム医療を追求し、患者さまやご家族の満足度の高い医療サービスの提供を目指します。

地域連携を推進し、急性期（救急）医療および在宅維持期を支えます。

職員が誇りと責任を持って働ける、安心できる職場環境作りを行います。

地域に開かれ、地域から支えられる存在となれるように努めます。

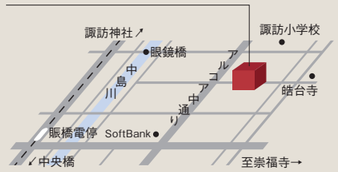
編集後記

本号より、新たに多職種からなる広報誌プロジェクトをつくり編集しました。日ごろの取り組みを各スタッフの想いも含めお伝えしていきたいと考えています。平成31年度は広報誌の年間テーマを「新たな10年に向けて、大事にしていくこと、これから取り組むこと」として新たな理念とともに、さらに進化を目指す当法人の方向性をお伝えしていきます。ご期待ください。
（新理念は次号でご紹介します）

一般社団法人 是真会
長崎リハビリテーション病院
在宅支援リハビリテーションセンターぎんや

〒850-0854　長崎市銀屋町4番11号
TEL.095-818-2002
FAX.095-821-1187
http://www.zeshinkai.or.jp

長崎リハビリテーション病院
在宅支援リハビリテーションセンターぎんや



発行／一般社団法人 是真会
2018年12月 vol.14 季刊誌
企画・編集／一般社団法人 是真会
制作／（株）イーズワークス

Topics

西日本豪雨災害で災害リハビリテーション支援

平成30年7月の西日本豪雨災害において、7/25～26・8/2～8/4の2回に分け※Nagasaki-JRATの協力医療機関から混成チームを結成し、当院からは計5名のスタッフが、避難所における生活不活発病による災害関連死を防ぐ目的で災害リハビリテーション支援を行いました。

※ Nagasaki-JRAT=全国に都道府県単位で災害リハビリテーション支援を目的に組織されている「地域JRAT」の長崎における組織。長崎県内34の協力医療機関で構成。

秋祭りにて、上柿元勝シェフ特製スープ提供

10月21日に開催した秋祭りにて、今年は上柿元勝シェフの特製スープを提供しました。自然の恵みに感謝し、心を込めた料理の提供を続ける上柿元氏のスープは大好評。スープを飲んだお客さまの顔からは笑みがこぼれていました。

時津風部屋の力士が当院を訪問

11月2日、時津風部屋の豊山関と豊ノ島関が来院しました。当日は正面玄関に時津風部屋ののぼりを立てて歓迎。大きな拍手と歓声でお2人を迎えました。患者さまの前で九州場所に向けての抱負やメッセージを力強く語ったお2人は、記念写真や握手にも気さくに応えてくださり、思い出に残る1日となりました。

平成30年4月～9月（6ヵ月間）の診療実績

患者数	
新規入院患者数	280人
退院患者数	306人
外来患者数（のべ）	1,580人

※新規入院患者とは継続入院の患者を除いた人数

新規入院患者　疾患別人数・平均在院日数		
疾患名	疾患別人数	平均在院日数
脳血管疾患	210人	87.22日
運動器疾患	61人	54.53日
廃用症候群	8人	42.64日
適応外疾患	1人	47.67日

新規入院患者内訳	男性	女性	合計
人数	146人	134人	280人
うち、65歳から74歳の割合	29%	19%	24%
うち、75歳以上の割合	43%	66%	54%

平成30年6月～11月（6ヵ月間）の施設基準実績

在宅復帰率	93.50%	自宅・居宅系介護施設等・介護医療院・介護サービスを提供している有床診療所へ退院した患者（死亡退院・再入院患者を除く） ／ 死亡退院・一般病棟への転棟・転院患者・再入院患者を除く退院患者

※当院が算定する入院基本料は、70%以上が基準となっています。

重症患者割合	40.60%	新たに入院した方の中で、日常生活機能評価が10点以上だった人の割合

※当院が算定する入院基本料は、30%以上が基準となっています。

リハビリテーション実績指数	45.31	退院時の運動能力 － 入院時の運動能力 ／ 入院期間 ÷ 診療報酬上の算定上限日数

※回復期リハビリテーション病棟に入院した結果、自立度や介助量がどれだけ回復、改善したのか示す指数です。
当院が算定する入院基本料は、37以上が基準となっています。

一般社団法人 是真会 長崎リハビリテーション病院／在宅支援リハビリテーションセンターぎんや 広報誌

ぎんやんにき通信

「銀屋んにき」／長崎弁で銀屋周辺の意

五島市・堂崎教会

一般社団法人 是真会
長崎リハビリテーション病院
在宅支援リハビリテーションセンターぎんや

vol.14
2018.12

五島列島へ。患者さまを訪ねる旅に出発!

大小の島々が点在する長崎県。人が住む有人島の数も、日本一と言われています。

当院では開院当初より、五島列島など島在住の患者さまを受け入れています。患者さまの数は徐々に増え、8年前から毎年夏に、当院スタッフによる五島訪問を実施し、2泊3日で五島列島を巡ります。退院後、ご自宅へ戻られた患者さまの現状を拝見すると共に、退院を控えた患者さまの病前生活についての情報収集や、退院後に向けた環境調査を主な目的としています。また、現地で入所中の施設や利用中の通所事業所などを訪ね、スタッフの皆さんへのあいさつや施設見学をさせていただいています。

2018年は栗原理事長をはじめとする総勢18名にて、8月2日から4日までの日程で五島列島へ。訪問初日の五島市(福江島)での活動を中心に、取り組みの様子をご紹介します。

8月2日、出発日。晴天に恵まれた長崎港をジェットフォイルで一路、福江港へ向かった訪問団は1時間半の船旅を終え、島に降り立ちました。ここからは病棟ごとと地域連携室の4グループに分かれて行動。患者さまが生活するご自宅、施設、病院など島内を回り、さらに午後からはスタッフ2名が船を乗り継いで、奈留(なる)島へ向かいました。

各グループは多職種によって構成されます。それぞれ出発前には、たとえば退院時の体の動きや食事、排泄といった身の回りの動作、家事動作など患者さまの状況を、電子カルテや入院当時の担当者より情報収集したうえで、訪問に臨みました。

福江港ターミナル前で全員集合。ここからグループに分かれて訪問スタート。

2018年　五島訪問行程

8月2日	長崎港→福江港	福江島·奈留島訪問
8月3日	午前	引き続き福江島訪問→上五島へ
8月4日	午後	上五島·小値賀島訪問→長崎へ

退院されそれぞれの生活に戻られた
患者さまとご家族の声に耳を傾けた3日間。
住み慣れた地域でその人らしく
いきいきとした暮らしを送っていただくために何が必要か、
日頃の業務を検証する貴重な経験となった
五島訪問の様子をレポートします。

特集

五島訪問 2018レポート

久しぶりの再会は

初日の午後、4階チームがお邪魔したのは、2017年12月に退院された患者様のご自宅です。介護されているご家族に、「ご家族は介護に対しての負担を感じていないか」「自宅のトイレで排泄できているか」「トイレの後に気分が悪くなることはないか」「日課としていた毎日のお祈りは続けているか」と、入院中に練習してきた事や、入院前の日課が継続できているか等、担当スタッフからの質問事項を確認。また、入院時の担当者が同行できなかったため、メッセージをしたためた色紙をご本人へお渡ししたところ、笑顔になってくださったことがとても感動的でした。

別のお宅では、入院時は精神面が不安定だった方がその時のご自分について、客観的にお話される姿に驚く場面もありました。

一方、課題を感じる場面も。患者さまの中には「五島ではしっかりとしたリハビリをできるところが少ない」と話す方や、「昼間はやることがない」と話す方も数名いらっしゃいました。退院後どのように活動性を維持していくのか、現地の医療機関との連携を含めたフォローアップの重要性は、課題のひとつであり、特に上五島は訪問リハビリなどのサービスが不足しているように感じました。

当院では、上五島病院とWEBシステム「あじさいネット」を用いた遠隔でのカンファレンスを行っています。また現地訪問の折には、同病院の皆さんと情報交換会を開催。生活期スタッフも参加する中、当院へ紹介された患者さまについて急性期・回復期・生活期それぞれの視点から経過を報告し、情報を共有しています。

五島訪問を終えた今、思い出すのは入院中とはまたちがう、自然体の笑顔です。私たちが今後さらに取り組むことができるのはどんなことか。退院後の生活を想定した介護指導、退院時のマネジメントなど課題はまだまだ山積みです。ご家族や地域の人々を巻き込んだ活動・参加の支援も考えなくてはなりません。

いずれにしても住み慣れた地域とそこに暮らすご家族や友人たちの存在は癒やしになるだけでなく、患者さまの可能性を引き出します。そんな目には見えない大きな力を感じ、改めて原点に立ち返ることができた3日間でした。

上五島病院との交流会の様子

離島からの受け入れ患者数
31名（2017年度）

訪問スタッフの内訳（2018年）
医師2名
看護師4名
理学療法士5名
作業療法士2名
言語聴覚士1名
介護福祉士1名
社会福祉士2名
事務1名

訪問した患者さまの人数
34名（2018年）（入院中3名含む）

穏やかな 笑顔とともに

五島訪問を終えて

**訪問終了後には病棟単位での報告会をはじめ、
全職員を対象にした報告会を設け、訪問の成果とともに
今後の課題について共有しました。**

ご家族さまが患者さまのことや生活状況を、入院中に面会に来ている時よりも、実際の環境に沿って詳しく話してくださいました。

自宅への退院が困難だと考えていた方でも、地域のサポートを受けながら生活は可能であると感じました。ただ訪問リハなどのサービスは不十分であり、特にリハサービスが不足している上五島の患者さまのADL（日常生活動作）が低下している印象を受けました。

高齢夫婦お2人の生活であっても、五島ではごく普通のこと。「子どもは大きくなったら出ていくもの」と考える方が多く、色々考えながら頑張っているというケアマネジャーの話を聞き感銘を受けました。困難なケースであっても、現地スタッフに相談すれば方法が見つかるのではないか。そのためには、今回の五島訪問は顔の見える関係作りに大いに効果があったと考えます。

介護に専念するために仕事を辞めたご家族も。本人のペースに合わせて生活できるので介護が楽になったと笑っておられすごいなと感じました。五島ではリハビリができるところが少ないとおっしゃる方もおられたので、退院後の自主練習などの提案も重要だと思いました。

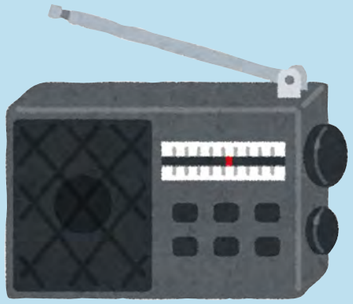
スタッフのことを思い出して涙を流す方もおられ、患者さまにとって当院での入院期間は非常に大きなものであることを実感しました。

住み慣れた地域に帰ると、入院中よりも表情が良く、活動的な生活を送っている方が多かったです。

一番印象に残っているのは、地域の特性に合わせ、ご家族が「頑張りすぎない介護」を実践していたこと。仕事との両立をやめ、力での移乗もやめ、家族のストレスが少しでも和らいだことで介護される当事者の方も笑顔が増えたとか。これには考えさせられるものがありました。こういう介護の方法もあるのだと、ご家族に提示することが今後できるなと思いました。

私たちが提案した内容に対し、地域の方から病前の生活をそのまま持続したいという希望が聞かれ、環境面を変更するつもりでしたが病前のままにしました。地元の方からその地域の特性や性格を細かく聞くことができるという点について、五島訪問に行かなければ分かりませんでした。

五島のサービス、リハビリなど社会資源について分からないことや患者さまの能力（歩行介助方法など）も伝えきれていない状態が多いと思いました。あじさいネットのような共有できる場を活かしていきたいです。



NEWS!

情報発信中！ いきいきと暮らせる街づくりを目指して

NBC長崎放送ラジオ

勝手気ままラジオ！ 川瀬隆史の“座・暴走老人”

2018年1月より毎週土曜日に放送中のラジオ番組「勝手気ままラジオ！川瀬隆史の“座・暴走老人”」は、かつての人気番組「川瀬隆史の電リクマン」で初代DJを務めていた川瀬隆史さんが、30年ぶりにマイクの前に立った話題の番組です。7月21日放送分からは、当院の栗原理事長が毎月1、2回ペースで出演。川瀬さんとの対談を通して、リハビリテーション医療や地域リハビリテーションについて分かりやすくお伝えしています。

10月20日・27日の放送では、当院で行われた公開収録の模様をお届けしました。栗原理事長、人材開発部長の伊東由美子、人材開発副部長・栄養管理室長の西岡心大、歯科衛生士リーダーの大石佳奈、地域リハ推進部副部長の本田憲一、そして当院を退院された後、患者・家族の会「長崎シャチ（幸）の会」の世話人をされている白濱詩子さんも出演。リハビリテーション病院で果たす役割や、患者さま・ご家族を取り巻くチームについて、そして退院後の地域での支援について、それぞれの視点からお話ししました。

川瀬さんの軽快なトークにリードしていただき楽しく進んだ公開収録。好評につき、来年も継続することが決定しました。次回は当院スタッフだけでなく、地域リハビリテーション活動に参加されている方々にもお声掛けできればと思います。

年を重ねても、障害を持っていても、いきいきと暮らせる街づくりを目指して、今後も情報発信をしていきたいと考えています。

公開収録 in 長崎リハビリテーション病院

10月20日・27日 放送分より

── 病院が開院して10年。振り返ってみていかがですか？

栗原理事長／最初の頃は、当院の役割を知っていただく過程の中で、随分しんどい思いをしたこともありましたが、今はある程度理解していただいているように思います。ますます高齢化が進み医療界の情勢が急速に変化する中で、これからもっと我々の役割を発信できるようになればと思います。

── これからの10年、20年も責任重大ですね。

栗原／いかに若い人材を次の担い手として、この病院で育てていくかということが緊急課題だと思っています。この病院ができた最初の目標、それだけは忘れないで欲しい。地域の方々の理解や応援も、ますます重要になってくると思います。

── 患者さまと接する際に一番大切にしなければならないことは何ですか？

伊東／たくさんあると思いますが、その方の病前の生活をきちんと知っておくこと、そしてご家族やご友人との関係性も重要な情報になると思います。また、チームの誰かが得た情報を全員に発信し、そして何が重要なのかを協議することも大切です。

── 管理栄養士のお仕事は随分、幅が広いんですね。

西岡／以前の病院の栄養士は、ドクターの指示にしたがって数字通りの食事をきちっと作ることが主な仕事でした。最近はチーム医療がさかんになり、管理栄養士も病棟に入って患者さまとお話をしたり、お体にさわったりしたうえで評価を行い、栄養計画を作成します。体格や運動量など個人差を踏まえ、適切な食事内容を提案しますので個人対応も多くなります。食事を作る厨房スタッフも大切なチームの一員です。

── 最近は研究が進み、体と口腔機能の関係性が重視されるようになりました。

大石／当院のように、歯科衛生士が常駐する病院や施設が増えてきたことは嬉しいですね。

口腔機能を維持するためには、歯科衛生士だけではできないこともたくさんあります。口腔内の清掃など、私たちがきちんと評価を行ったうえで、他の職種の方たちでもやりやすい方法を考えて提案しています。

── 地域リハ推進部の仕事内容について教えてください。

本田／「在宅支援リハビリテーションセンターぎんや」を利用される方の対応や、訪問リハビリ、さらに予防面としてはサロンなどへスタッフを派遣する取り組みも行っています。また退院後、患者さまは色々な介護サービスを受けられる訳ですが、そこにたずさわる専門職の方との勉強会や、ケアマネジャーさんとの協業なども私たちの仕事です。

── シャチ（幸）の会の活動を通し気持ちの変化はありましたか？

白濱さん／入院時はすごく落ち込んでいましたが、皆さんのおかげで現在にいたっています。

シャチ（幸）の会では年1回、体験談発表会を行っています。病気を患われたご本人とご家族の方のお話を聞いて、私自身、刺激になっています。

人材開発部長 伊東由美子

人材開発副部長・栄養管理室長 西岡心大（左）
歯科衛生士リーダー 大石佳奈（右）

地域リハ推進部副部長 本田憲一

長崎シャチ（幸）の会世話人 白濱詩子さん

NBCラジオ
勝手気ままラジオ！ 川瀬隆史の“座・暴走老人”
毎週土曜17時～17時半

これまで放送したテーマ

7月21日	リハビリテーションとはなにか
7月28日	地域医療連携と地域包括ケアについて
8月4日	長崎の斜面地について
	拠点病院の役割と紹介状について
	定年後の生活をいきいきと過ごすために
8月18日	地域住民活動（地域社会との接点）について
	高齢者のスキルや経験を役に立てること
9月8日	脳の老化防止について 口から食べることの大切さ

地域医療連携と地域包括ケアについて語る

栗原理事長 × 長崎みなとメディカルセンター理事長兼院長 兼松隆之先生

地方独立行政法人 長崎市立病院機構 長崎みなとメディカルセンターで、理事長兼院長を務められている兼松隆之先生と栗原理事長の対談が、7月28日と8月4日に放送されました。

長崎みなとメディカルセンターは、地域における急性期医療の核を担われている病院のひとつです。川瀬さんから投げかけられる疑問点や問題点に答える形でトークは進み、地域医療連携と地域包括ケアについて展開。情報共有することや広報の必要性、誰かのために何かの役割を担うことの大切さについても語り合いました。

地域活動に男性の参加を促すことの難しさも語られ、それぞれの料理自慢のお話も飛び出しました。

現場ヴォイス

住み慣れた街で安心して暮らすために地域リハビリテーションとは？

少子高齢化が深刻な社会問題としてとらえられている今、地域リハビリテーションの役割はさらに重要になっています。リハビリテーションは病院や施設の中だけにとどまりません。街づくりを支える大切な取り組みのひとつとして皆さんも私たちと一緒に考えてみませんか？

10月から始まった磨屋サロン。磨屋地区の高齢者の皆さんがストレッチ運動、茶話会、カラオケなどを楽しんでいます。

地域リハビリテーションの推進

介護保険制度とともに当院のような回復期リハビリテーション病棟は2000年に誕生しました。救急医療からできるだけ早くリハビリテーションを開始し、短期に集中して機能を回復し、必要があれば介護保険の分野でもリハビリテーションを継続しつつ、病前の自立した生活にできるだけ早く戻ることができるようにと、日々、進化を目指しています。

一方、団塊の世代が75歳を超える2025年には、今以上にご高齢の方が増え、それを支える働く人口は少子化が進み減少します。今の社会保障制度では対応できないことは明らかであり、このことに対応しようと、国は「地域包括ケアシステム」という仕組みづくりを推進しています。「住まい」「医療」「介護」「予防」「生活支援」の面から介護が必要な方やご高齢の方をサポートし、住み慣れた街で人生を最後までいきいきと過ごすために様々な取り組みが進められています。

「地域リハビリテーション」とは、その「地域包括ケアシステム」をリハビリテーションの立場から支えようというものです。

私たちは、この「地域リハビリテーション」の推進を法人理念に掲げています。医療、介護サービスの提供にとどまらず、介護予防など保健・福祉においても「地域リハビリテーション」の考え方を全ての活動の軸に置いています。

「地域包括ケアシステム」を支えるために具体的には「集う」「出る」「育む」の3つの班をつくり、入院患者さま、退院患者さま、地域の方々などを対象に集いの場や活動の場づくり、介護や健康をテーマにした学びの提供など活動は多岐にわたります。

活動に関わるスタッフは、ボランティアとして参加します。業務とは離れたところで知識や技術を発揮し、活動を通して自身も地域づくりを学ぶ貴重な機会になっています。

地域リハビリテーション

障害のある子供や成人・高齢者とその家族が、住み慣れたところで、一生安全に、その人らしくいきいきとした生活ができるように、保健・医療・福祉・介護及び地域住民を含め生活にかかわるあらゆる人々や機関・組織がリハビリテーションの立場から協力し合って行なう活動のすべてを言う。（日本リハビリテーション病院・施設協会 2016改定）

私たちはこんな活動に取り組んでいます！ 現場ヴォイス

ここでは「集う」「出る」「育む」の3つの班が、
この1年間に取り組んだ具体的な事業内容についてご紹介します。
2019年も新たな企画の立案や活動に、
積極的に取り組んでいきます。

集う班

“銀屋通りを憩いの場に、集いの場に”をキーワードに、居場所・行く場所・集う場所をつくることを目的にした事業です。現在は主に3つの活動を行っています。

活動情報

多楽福会（たらふくかい）

毎月1回、当院で行われる料理教室。当院を退院された方に、講師としてメニューの考案から調理指導まで担当していただきます。参加者は毎回10名程度で、調理や試食を通してコミュニケーションの場にもなっています。

長崎シャチ（幸）の会

患者さまとご家族の会。体験談発表会、茶話会、ウォークラリーなど自主イベントを実施。

季楽会（きらくかい）

入院されている患者さまや地域の書道教室に通う小学生など、季節ごとに作品を出品していただき院内ロビーに展示。展示を見た方々に感想を書いていただき、出展者へお伝えしています。

出る班

リクエスト講座や市町事業など、外部へ“出る”をキーワードに活動。依頼に応える形で当院スタッフを外部へ派遣しています。

活動情報

ぎんやウキウキ体操教室

銀屋町公民館で月2回実施。日々元気に過ごすことを目的に、地域の人同士が交流し、つながりを深めています。転倒予防や筋力アップするための体操などを行っています。

はつらつサークル医師会

長崎市医師会保健福祉センター主催で第2、4土曜14時～15時半に実施。健康体操や講話を行っています。

地域ケア推進会議

地域包括支援センターが定期的に主催しています。ここに地域の住民の方々、医療や介護の専門職などが集い、地域の様々な問題やその対応など検討しています。私たちも医療の立場で参加しています。

よろず介護教室

長崎市地域包括支援センター連絡協議会主催による、在宅で介護をされているご家族や介護に興味がある方を対象にした教室が、平成29年に開催されました。ベッド上の動作の指導や、車イスへの移乗方法など基本的な介護動作の説明、実技指導を行いました。

育む班

当事者や介護者、まわりの支援者などが“学ぶ”をキーワードに活動を展開。日頃の業務で困っていることや疑問点など、活発に意見を出し合い協議する場にもなっています。

活動情報

リハ・ケア交流会

在宅支援リハビリテーションセンター銀屋にて、毎月1回、近隣の介護保険事業所スタッフを対象に、ミニ講義と実技指導を実施。主に介護にたずさわるスタッフが交流を図ることで、地域におけるサービスの質を互いに高め合う目的があります。

健康教室

銀屋町周辺にお住いの方を対象に行っている講話会。健康に対する住民の方の疑問・質問に専門家が答えながら、健康への意識を高める取り組みです。当院にて2カ月に1回開催、時間は18時～19時頃。

休憩を終え諏訪神社へ向かう、栗原理事長（先頭から2番目）と銀屋町の皆さん。

当院前で休憩中の栗原理事長とスタッフ、そしてご家族の皆さん。くんち最終日とあって疲れが出たのか、こどもたちは夢の中でした。

特別編

長崎 まちぶら 散歩

地域とのつながりを深める

長崎くんち

今回のまちぶらは特別編！
長崎市中心部で10月7日から9日まで行われた、
長崎くんちの最終日「お上り」の様子を振り返ります。

諏訪神社の秋季大祭「長崎くんち」。その歴史は寛永11（1634）年、2人の遊女が謡曲「小舞」を奉納したことがはじまりと言われています。当時から豪華絢爛な奉納踊が見どころのひとつに挙げられ、現在は当院の所在地である銀屋町を含む59の町が、7年に一度の持ち回りで奉納しています。

次回、踊町を務める2021年を3年後に控えた今年、銀屋町は「年番町」と呼ばれる役回りを担当しました。年番町とは諏訪神社の祭事を取り仕切る、重要な役を担う町のことを言います。年番町の役員は、その年の元旦から年末まで神事に従事します。当院の栗原理事長も奉賛会長としてさまざまな神事にたずさわり、くんち当日は銀屋町の皆さんと一緒に「お上り」と「お下り」の行列のお供にも付きました。

お上り、お下りは諏訪、住吉、森崎の3体の御輿が、古式にのっとって長い隊列を組みながら静かに進んでいきます。当院でも希望者を募り、スタッフ家族4組が稚児行列へ加わることになりました。

また、お上りでは、銀屋町がお旅所と諏訪神社の中間地点に位置するため御輿行列の休憩に毎年当院を開放し、皆さんに利用していただいています。今年も3体の御輿が当院前に静かに到着すると、行列の参加者や見物人で大いに賑わい、患者さまの中には、明るい表情で記念撮影される方もいらっしゃいました。

地域に根ざし、そして開かれた病院を目指す当院にとって、地域とのつながりを深めるための貴重な場でもある長崎くんち。3年後には踊町の一員としてたずさわる予定です。

3年後は
スタッフも参加
鯱太鼓を
奉納します！